

ダモンとピュティアス

ダモンとピュティアス

(古代ギリシャの伝説)

昔、シチリア島のシラクサに、人を疑ってばかりいる王がいました。あるとき、ピュティアスという若者が、王に逆らったとして、死刑を言いわたされました。

ピュティアスは、王にたのみました。「遠い故郷に、年老いた母がいます。死ぬ前に、一度だけ会って、別れを告げさせてください。必ずもどってまいります。」

王は、あざ笑いました。「そんな約束を信じる者がいるものか。にげるに決まっている。」

すると、ピュティアスの親友のダモンが、進み出て言いました。「わたしが、ピュティアスの身代わりとして、牢屋に入ります。もし、かれがもどらなければ、わたしを代わりに死刑にしてください。」

約束の日が来ました。夕方になっても、ピュティアスはもどりません。王は、「それ見たことか。」と、ダモンを刑場へ連れていきました。ところが、刑が行われようとしたそのとき、ぼろぼろになったピュティアスが、息を切らせてかけこんできたのです。帰り道で、あらしや川の増水にあい、必死に道を急いできたのでした。

二人は、だき合って喜びました。その姿を見た王は、深く心を打たれ、二人を許しました。そして、「わたしも、その友情の仲間に加えてはくれないか。」と言ったと伝えられています。

1 ピュティアスが、故郷に帰りたいとたのんだのはどうしてですか。

2 王は、ピュティアスの約束をどう思いましたか。

ア 必ずもどってくると信じた。

イ にげるに決まっていると思った。

ウ どちらでもよいと思った。

3 ピュティアスの身代わりとなったのは、だれですか。

親友の

4 ピュティアスのもどりがおくれたのは、どうしてですか。

5 この話で、作者がいちばん伝えたいことは何だと思いますか。
